

永井隆平和記念・長崎賞 受賞者一覧表

年齢、経歴等はいずれも受賞時点の状況である。

	①受賞者氏名 ②性別・年齢 ③国籍 ④職業等 ⑤活動期間	主な経歴及び業績
第1回 ※H7年度	①秋月 辰一郎 ②男・79歳 ③日本 ④医師 聖フランシスコ病院顧問 ⑤1940～1995 (55年間)	1940 京都大学医学部卒業 長崎医科大学放射線科助手(主任 永井隆助教授)、高原内科医院を経て浦上第一病院(現聖フランシスコ病院)医長となる。 1950年から長崎で被爆直後より被爆者治療に従事。 1966年に「長崎原爆記録」を出版。被爆直後の浦上第一病院における被爆者医療の実態と人々の生き様を描写して衝撃を与え、後に英訳され、欧米の人々にも感銘を与えた。
第2回 ※H9年度	①ハルムハフ・パリュアノヴィッチ ②男・75歳 ③カザフスタン共和国 ④放射線腫瘍医学研究所所長 ⑤40年間	旧ソ連軍事体制下でのセミパラチンスク核実験場の被害を命懸けで明らかにした中心人物。「中部カザフスタンにおける環境放射能と住民及び家畜の健康状態」は広くセミパラチンスク問題を知らせる報告書となっている。 その後も放射線生物分野の第一人者としてカザフ医学界で活躍。真摯なヒバクシャ医療への取組は、カザフのみならず、旧ソ連崩壊後の世界反核医師連帯やセメイ・ネバダ反核運動の中核人物として尊敬されている。
第3回 ※H11年度	①ヨハネス・ヤコブ・ブローセ ②男・65歳 ③オランダ ④ライデン大学教授 ⑤40年間	1959 アムステルダム大学卒業(原子核物理学専攻) 1964年に発表した中性子の酸素増感比及び1971年の相対的生物効果の研究成果は世界的に高く評価されている。 また、ICRU報告書27(国際的中性子測定相互比較)報告委員会の委員を務め、ヨーロッパ中性子相互比較(ENDIP)を組織した。 その後の中性子被曝によるラット及びアカゲザルの発癌研究成果は、原爆放射線、特に中性子の被爆者に与える影響を解析するうえで貴重な資料となっている。中性子の危険因子と相対的生物効果を明確にした第一人者。
第4回 ※H13年度	①エウゲニイ・デミチュク ②男・76歳 ③ベラルーシ共和国 ④放射線内分泌研究所 甲状腺部門部長 ⑤15年間	長年の甲状腺外科医としての実績を有し、ベラルーシ共和国唯一の手術センターの責任者として、チェルノブイリ原発事故後に激増した小児甲状腺がん患者に対して大車輪の活躍をした功績が国内外で高く評価されている。 特に、1992年に世界で初めて小児甲状腺がんの増加を「Nature」に報告し、その後は各種国際共同プロジェクトを担当すると同時に、術後患者のヨード131治療をミンスクに確立し、多数の小児甲状腺がん患者の救世主として尊敬されている。
第5回 ※H15年度	①日本チェルノブイリ連帯基金 ③日本 ④NGO ⑤12年間	チェルノブイリ原発事故被災地で放射能災禍に苦しむ人々を救済するために、ベラルーシ共和国をはじめとする現地の医療専門家とともに集団検診や治療を行っている。 小児甲状腺がん、小児白血病、肺がんの検診と治療のために必要な医療品や医療機器を12年間で約6億円現地に贈った。 1991年の設立当初から信州大学医学部と協力して活動を行っており、的確な医療支援は現地の行政関係者や病院から高く評価されている。

永井隆平和記念・長崎賞 受賞者一覧表

年齢、経歴等はいずれも受賞時点の状況である。

	①受賞者氏名 ②性別・年齢 ③国籍 ④職業等 ⑤活動期間	主な経歴及び業績
第6回 ※H17年度	①市丸 道人 ②男・80歳 ③日本 ④医療法人佐世保同人会 サンメモリハビリ病院院長 ⑤54年間	1950 長崎医科大学卒業 長崎医科大学在籍中に原爆を体験した。卒業後同大学の第2内科において血液内科学と原爆後障害医療の研究を開始し、白血病を主体とする原爆後障害研究において長崎の中心研究者となる。 1980年以来、IPPNW国際評議員長崎支部副支部長、顧問として長年にわたり、核兵器廃絶運動に携わり活躍し、1985年のIPPWNのノーベル平和賞受賞に貢献した。その後も核廃絶並びに北東アジアにおける非核化と平和共存を目指し、活動を続け尽力した。
第7回 ※H19年度	①アナトリー・ツイーフ ②男・73歳 ③ロシア ④オブニンスク放射線医学研究所所長 ⑤48年間	放射線専門医として、ロシアの放射線医療分野で中心的な役割を担っており、チェルノブイリ原発事故後、被災住民を支援するための各種プロジェクトのトップとして活動している。 チェルノブイリ事故当時、オブニンスク放射線医学研究所所長として緊急事態対応の医療支援救済組織、環境放射線測量チーム、放射線汚染地域の住民の健康状態をモニタリングするチームなどを編成した。また、政府が被災者救済組織を設けた際の代表者となった。その後、数十万人に及ぶチェルノブイリ周辺住民及び事故後の除センサ業者の個人被ばく線量の測定-評価を手動管理し、当時の被災登録記録をもとに被ばく者のデータベースを構築し、現在まで長期追跡調査を遂行している。 ツィーフ氏の功績により、現在オブニンスク医学放射線研究所は、WHO放射線疫学協力研究センターと緊急被ばく医療REMPANセンターの2つに選ばれ国際活動を展開している。
第8回 ※H21年度	①クリストフ・ライナー ②男・63歳 ③ドイツ ④ビュルツブルグ大学病院長 ⑤19年間	1992年チェルノブイリ原発事故では最も被害が甚大なベラルーシ共和国との間での人道主義的共同研究プロジェクトを開始している。 1995年以降ビュルツブルグ大学医学部核医学教授となり、ベラルーシ共和国での放射線誘発甲状腺癌の早期診断と再発診断に大きく貢献した。特に放射性ヨウ素治療の専門家として甲状腺がんの多発問題の解決に尽力し、ミンスク甲状腺癌センターに新たに甲状腺癌の診断と治療を目的にアイソトープ診断と治療の為の核医学治療部門を創設している。同様な核医学治療部門をウクライナキエフ内分泌研究所にも立ち上げ、多発している甲状腺癌の治療成績向上と長期追跡調査に大きく貢献している。
第9回 ※H23年度	①ミコラ・トロンコ ②男・68歳 ③ウクライナ ④ウクライナ医学アカデミー-内分泌代謝研究所長 ⑤42年間	チェルノブイリ事故が発生する一か月前の1986年3月にウクライナ医学アカデミー内分泌代謝研究所所長に就任。以降、一貫してチェルノブイリ事故による住民の甲状腺への影響に関する調査、検診事業に携わり、1995年にはウクライナにおいて小児甲状腺がんが増加していることをNature誌に報告し、世界的な注目を浴びた。 さらに国際共同研究を推進することによってチェルノブイリ事故によって激増した甲状腺がんにおいて、Ret遺伝子の再配列という遺伝子異常が高頻度に見られることを世界に先駆けて報告するなど、放射線誘発性甲状腺がんの疫学、分子生物学的研究をリードしてきた。 また、種々の国際プロジェクトにも長年積極的に参画し、WHO(世界保健機関)の国際チェルノブイリ甲状腺組織バンクプロジェクトにおいても、ウクライナの代表機関として放射線誘発甲状腺がんの摘出標本の管理にあたっている。

永井隆平和記念・長崎賞 受賞者一覧表

年齢、経歴等はいずれも授賞時点の状況である。

	①受賞者氏名 ②性別・年齢 ③国籍 ④職業等 ⑤活動期間	主な経歴及び業績
第10回 ※H26年度	①丹羽 太貫 ②男・71歳 ③日本 ④福島県立医科大学放射線医学県民センター特命教授 ⑤43年間	平成12年～15年：日本放射線影響学会会長 平成13年～21年：国際放射線防護委員会(ICRP)第一委員会委員 平成13年4月～20年3月：財団法人放射線影響研究所 専門評議員 平成21年～23年：国際放射線研究連合(IARP)会長 平成21年～：国際放射線防護委員会(ICRP)主委員会委員 平成23年4月～：財団法人放射線影響研究所 評議委員 京都大学卒業後、放射線生物学研究者として活躍し、1984年に広島大学原爆放射能医学研究所の教授として赴任中に原爆被爆者の健康影響、特に幹細胞の放射線発がん機構に着目し、種々の研究業績を挙げている。 1997年京都大学放射線生物学研究センターの教授に異動後も放射線影響研究の第一人者として国内学会を牽引し、多くの研究業績を挙げている。
第11回 ※H28年度	①ドミトリー・バジーカ ②男・64歳 ③ウクライナ ④国立放射線医学研究センター所長 ⑤40年間	1987年 国立放射線医学研究センター臨床免疫ラボ研究員として免疫学を専攻 2011年 国立放射線医学研究センター所長 研究の分野は、放射線生物学、疫学、免疫学、放射線防護学と多岐にわたっている。チェルノブイリ事故直後の1986年4月より、被曝した内務省職員の治療に医療コンサルタントとして参加し、国立放射線医学センターにおいて放射線被曝の研究を開始した。1987年5月に臨床免疫学ラボにおいて上級研究者として細胞性免疫と放射線被曝による免疫不全の治療に関する研究を行った。1989年から1996年にかけて30kmの立ち入り禁止地域の除染作業員やスタッフ、キエフとスラヴーチチの子供たちのため放射線被曝による急性放射線障害の治療の研究を行っている。1996年から放射線誘発性白血病の診断と骨髄異形成症候群治療の副作用の低減化の研究を行っている。 国際的には2008年からUNSCEAR(原子放射線の影響に関する国連科学委員会)に参加し、2011年からウクライナの代表を務めている。 また、チェルノブイリ原発事故により被曝した人々への治療と放射線の健康影響に関する研究へ尽力され、低線量被曝の初期及び晩発期における細胞への効果の分子的仕組みの研究において重要な貢献をなし、チェルノブイリ原発事故後の汚染地域に住む人々の二次性免疫不全の治療と血液学領域の健康影響についても顕著な研究結果を残している。
第12回 ※H30年度	①タナ・ボグダノワ ②女・70歳 ③ウクライナ ④ウクライナ国立内分泌代謝研究所 内分泌病理研究部門長 ⑤27年間	1974年～1992年 国立内分泌代謝研究所 研究員 1992年～現在 国立内分泌代謝研究所 内分泌病理研究部門長 2002年～ キエフ国立大学教授(内分泌学) 内分泌病理学の専門家として放射線誘発甲状腺がんに着目し、チェルノブイリ原発事故により被ばくした若年者の甲状腺がんの診断及び調査研究において、長年に亘り多大な貢献をしてきた。 チェルノブイリ原発事故の発生後に多発した放射線誘発小児甲状腺がんについて、病理学の観点からその特徴を詳細に検討し、他の研究者との共同研究も数多く行っている。 また、ボグダノワ氏が参画した甲状腺がん国際チェルノブイリ組織バンク(CTB)では、ウクライナにおける組織の立ち上げと甲状腺がんサンプルの収集や病理標本の作成において、主導的な役割を果たした。 さらに、EU、アメリカ、ドイツ、日本との数多くの共同国際プロジェクトに参画し、国内外の学会や会議で、これまでに得た重要な知見を発表している。

永井隆平和記念・長崎賞 受賞者一覧表

年齢、経歴等はいずれも授賞時点の状況である。

	①受賞者氏名 ②性別・年齢 ③国籍 ④職業等 ⑤活動期間	主な経歴及び業績
第13回 ※R2年度	①佐々木 康人 ②男・83歳 ③日本 ④湘南鎌倉総合病院附属臨床研究センター 放射線治療研究センター長 放射線影響協会理事長 ⑤57年間	<ul style="list-style-type: none"> ・2001－2009年 国際放射線防護委員会(ICRP)主委員会委員 ・2004－2005年 原子放射線の影響に関する国連科学委員会(UNSCEAR)議長 ・2003－2007年 放射線審議会会長 ・2001－2008年 原子爆弾被爆者医療分科会会長 <p>核医学におけるシンチスキャナー、カテーテル型半導体放射線検出器、そしてインビトロラジオアッセイ法を用いた薬物投与設計、乳糖分解酵素欠損症の診断法さらにはPET/CTのプロトタイプ画像開発など、種々の核医学における先駆的な成果を打ち立てた。</p> <p>炭素イオン線による重粒子線治療の臨床試行、治験を指揮し、患者にやさしいがん治療法として確立した。</p> <p>1999年の東海村JCO臨海事故の後、放射線医学総合研究所へ搬送された重度被ばく者の治療を指揮するなど、原子力災害の分野において貢献した。</p> <p>原子爆弾被爆者医療分科会会長任期中に、新しい認定基準を定め、原爆症認定に被ばく者救済の立場に立つとの理念を明確にした。</p> <p>国際放射線防護委員会(ICRP)主委員会委員、第三委員会委員、国連科学委員会(UNSCEAR)の議長、日本代表としての活動を通じて、放射線の人体影響を放射線規則に反映し、より安全な社会作りに貢献した。</p>
第14回 ※R4年度	①前川 和彦 ②男・81歳 ③日本 ④東京大学名誉教授 医療法人社団明和会 上溝介護老人保健施設 いずみ 施設長 ⑤25年間	<ul style="list-style-type: none"> ・1998年 放射線医学総合研究所被ばく医療ネットワーク会議委員長 ・2000年 原子力安全委員会 原子力発電所等周辺防災対策専門部会 緊急時医療検討WG主査 ・2011年 内閣府原子力災害専門家グループ(特別調査員) ・2011年 内閣官房 低線量被ばく者のリスク管理に関するWG委員 ・2012年 環境省 原子力被災者等との健康についてのコミュニケーションにかかる有識者懇談会委員 ・2014年 厚生労働省 東電福島第一原発作業員の長期健康管理等に関する検討 <p>1998年発足の放射線医学総合研究所被ばく医療ネットワーク会議委員長を努め、1999年に起こった東海村JCO臨海事故では、被ばく患者治療の陣頭指揮をとり、高線量被ばくの病態生理を明らかにした。</p> <p>東日本大震災での福島第一原子力発電事故では、内閣府の特別調査員として、被災者の被ばくに係る長期的な医療、健康管理に関すること、放射性物質の人体への影響に関すること等について、助言を行い、また、福島原発内における緊急医療体制を整えた。</p> <p>放射線事故医療研究会 代表理事、原子力安全研究協会 放射線災害医療研究所 所長を歴任しながら、被ばく医療、放射線事故・災害に関する経験知を国内外に発信し続けている。</p> <p>「緊急被ばく医療のあり方について」「原子力施設等の防災対策の指針」や防災基本計画の改訂の際、被ばく医療の状況に応じた医療体制の整備など、被ばく医療面で多大な貢献を行い、現在の日本における被ばく医療体制の基礎構築を黎明期より中心で支えられたことで、ヒバクシャ医療の向上と発展に貢献された。</p>